

「古風」と「流行」から少女たちが学ぶこと —オルコット『昔かたぎの少女』—

羽澄 直子

What Girls Learn from “Old-fashioned” and “Fashionable” in Alcott’s *An Old-Fashioned Girl*

Naoko HAZUMI

1. 新しい少女小説

今もなお読み継がれている『若草物語』(Little Women, 第1部1868、第2部1869)、『昔かたぎの少女』(An Old-Fashioned Girl, 1870)、『八人のいとこ』(Eight Cousins, 1875)、『花ざかりのローズ』(Rose in Bloom, 1876)といった一連の少女小説の成功により、ルイザ・メイ・オルコット(Louisa May Alcott)は人気作家の地位を不動のものとし、「子どもたちの友」という名声を確立した(Stern 〈2〉259)。しかしオルコットにとって初めての本格的な少女向けの長編となった『若草物語』は、ロバート・ブラザーズ社の編集者トーマス・ナイルズ(Thomas Niles)の要望から誕生したもので、作者自身が好んで選んだテーマではなかった(Matteson 328)。当時、少女向けとみなされる作品は、読者層の中心である中産階級の価値観を基に、「家庭の天使」という理想的な女性像を提示する教育的役割を担っていたが、その使命を重視するあまり、道徳色や宗教色が強く類型的で作品としては退屈なものも多かった。そこで良質かつ娯楽性に富む少女小説の需要を確信したナイルズは、南北戦争での従軍看護師の経験をつづった『ホスピタル・スケッチ』(Hospital Sketches, 1863)で作家としてすでに定評のあったオルコットであれば、アメリカの少女たちが親しみ共感できる楽しい物語が書けると考え、執筆を依頼したのであった(Stern 〈1〉168)。

主に大人向けの作品やエッセー、さらには素性を隠しペンネームを使って煽情的な小説を書いていたオルコットは当初、少女を対象とした小説の執筆にはあまり積極的ではなかった(Journals, 165)。しかし1867年から子供向け月刊誌『メリーズ・ミュージアム』(Merry’s Museum)の編集に携わるようになり、「女の子には生き生きとした飾り気のない物語が必要」

(Journals, 166)と感じていたオルコットはナイルズの求めに応じ、自分の家族をモデルに、善良で慎み深く献身的な「小さな婦人」になろうと悪戦苦闘する等身大のマーチ姉妹を創造した。¹この執筆は彼女にとっては「実験的な試み」であったが、原稿は「素朴で真実味があり、物語のなかに私たちが息づいている」と自賛できるものに仕上がった(Journals, 166)。1868年10月に出版された『若草物語』の売れ行きは予想以上で、あまりの反響の大きさからすぐに続編が求められた。翌11月に着手されたマーチ家3年後の物語は『若草物語第2部』として1869年4月に出版され、前作同様の好評を得た(Journals, 167)。²

『若草物語』の成功を受けて、さらなる新しい少女小説の執筆をナイルズに依頼されたオルコットは、純朴なポーリー・ミルトンの少女期(14歳)と青年期(20歳)の物語に取りかかった。体調不良に苦しみながらの創作だったが、自分のよく知る世界を題材としたため、書き上がり

は早かった（Stern 〈1〉 186, 190）。この新作は『昔かたぎの少女』というタイトルで1869年7月から12月まで『メリーズ・ミュージアム』誌に連載され、1870年3月に単行本として出版されるとたちまちベストセラーとなった。

『若草物語』を執筆するにあたり、オルcottは若い読者が読みやすいよう平易な語彙と文体を心がけた（Stern 〈1〉 169）。いわゆる当世風の風俗描写が特徴の一つになっている『昔かたぎの少女』では、さらに親しみやすく生き生きとした表現が随所に現れるが、時には破格で軽薄とも受け取られかねない文中の言葉使いについて、作者は作品内で次のように釈明する。

純正の英語を偏愛する読者の方たちの耳目を、上記のような〔軽薄な〕表現でぎょっとさせなくてはならないことを私は申し訳なく思う。しかし若いアメリカのために小さな物語を書くという大役を無謀にも引き受けたからには、私の荣誉ある愛読者たちをできる限り忠実に描く義務が私にはあるのだ。さもないければ私は「確かにきちんとして正しいかもしれないけれど、私たちがらしくないわ」という厳しい批判を受け、『昔かたぎの少女』の本の表紙が「多くの人に読まれて」図書館でよれよれになるような名誉を得る望みはなくなるだろう。（215-6）

『アトランティック・マンスリー』（*The Atlantic Monthly*）誌の書評では、「文法はひどいし文体は稚拙」（Clark 110）と批判された。このような指摘に対して作者は家族への手紙のなかで、「『昔かたぎの少女』がどれほどの痛みと苦しみのなかで急いで書かれたかを知ったら、文法が誤りだらけなもの無理はないと人は思うだろう」と言い訳し、次回作の原稿はいとこに目を通してもらい誤りをなくすつもりだと記している（*Letters*, 135）。読者を常に意識しながらも、立ち止まる余裕もなく勢いで書かれた『昔かたぎの少女』は、その特徴的な文法や文体、語彙が魅力でもあり欠点でもあった。

『昔かたぎの少女』には、『若草物語』と同じくオルcott自身の実体験が取り入れられているが（Reisen 223）、簡素で勤労を尊ぶ中産階級の道德観がより前面に押し出され、教訓的な色彩が強くなっている。従って『昔かたぎの少女』には『若草物語』よりも保守的で、伝統的な少女小説の定義に近い作品という一面があるだろう。しかしポーリーと彼女を取り巻く人々の描写には、『若草物語』にもみられた「因習への異議」といった少女小説らしからぬ反逆性が、時にはあからさま過ぎるほど強く込められており、女性たちに「自立や冒険よりも、慎み深さ、結婚、従順さを奨励」（Showalter xv）する通常の少女小説とは一線を画している。³本稿では、『昔かたぎの少女』に描かれる少女たちの姿を、オルcottの持つさまざまな社会批判の視点をふまえながら考察していきたい。

2. 対照的な価値観と社会階級

アメリカには出自による階級差は存在せずすべての人間は生まれながらに平等な機会が与えられるという言説は建前であって、現実の社会には財力や教育、居住地、人種等による厳然とした格差がみられるのは周知の事実であろう。アメリカ北部では産業主義の推進による経済体制が発展する1830年代から50年代にかけて、社会階層の形成が顕著になっていったとされる（田中 5-7）。南北戦争後のニューイングランドを舞台にした『昔かたぎの少女』では、読者を啓蒙するにあたり、社会階層や生活環境による価値観の相違が俎上にあげられている。具体的にいうと、裕福な上流階級の虚栄と質素な中産階級の堅実さの対比である。

『昔かたぎの少女』は田舎育ちの14歳のポリーが都会の裕福なショー家に滞在するところから始まる。ポリーの素朴な言動は常に流行を追う都会の生活様式にそぐわず「古めかしい」「時代遅れ」とみなされ、時には周囲を呆れさせる。しかし無垢で実直で芯の通ったポリーに、ショー家の子どもたち—16歳のファニー、14歳のトム、6歳のモード—は徐々に感化される。数か月の滞在後、ポリーは温かい家族の待つなつかしい家に帰っていく。6年後、再び都会にやってきた20歳のポリーは、音楽教師として自活を始める。ショー家の子どもたちとの親交は続き、ファニーはポリーの親友となるが、恋愛問題で関係がこじれかけたこともある。ショー家の父親が財産を失って生活が一変すると、ポリーは儉約の方法を指南するなど実務的にも精神的にも彼らを支える。これは長年彼女を都会で庇護してくれたショー家への恩義の表れでもある。最初は相容れない部分の多かったショー家とポリーの世界は、最後には深い絆で結ばれる。

“Old-fashioned”なポリーの存在は、上流階級に属する当世風の“fashionable”な人々の軽薄さ、愚かさを際立たせる。上流階級の華やかで浮かれた生活は、『若草物語』のなかでもあこがれと揶揄の対象であったが、『昔かたぎの少女』では「上流階級のファッショナブルな生活の浅薄さが若い娘に与える悪影響が作品の中心テーマ」(Matteson 360)であり、彼らに向ける作者の批判は容赦ない。ポリーが滞在するショー家は金銭的には満ち足りているが精神的な深みが欠落したどことなく空虚な家で、裕福でなくとも愛情と良識に包まれた『若草物語』のマーチ家とは全く逆の設定になっている(Stern 〈1〉 186)。ショー家のモデルの一部はオルcottの母方の富裕な親戚たちだとされている(Reisen 223)。

初めて都会を訪れた快活なポリーは世知にはうといが、ショー家の人たちが幸せそうでないことにすぐ気がつき、一家のひずみを本能的に見抜く。主のショー氏は温厚で、娘の好ましくない交友関係を諫めるような良識を持ちあわせているが、仕事に忙しく富を増やすことに余念がない。その結果、彼は家族に無関心だと妻や子に思われ、双方の心はすれ違う。このショー氏の設定は、19世紀末から20世紀にかけてアメリカの作家がよく取り上げた「裕福ゆえに絆の壊れる家族」というテーマを先取りするものだとマテソンは指摘する(362)。豪華な生活を望む妻や子の果てしない欲求に応えるために金儲けに専心し、家族を金銭だけの結びつきにしてしまう夫である。のちにマーク・トウェイン(Mark Twain)が「金めつき時代」(Gilded Age)と呼んだ、南北戦争後の拝金主義が蔓延する時代に生きるショー一家は、暇を持てあます上流階級が当世の浮ついた物質主義に結びついて墮落した一例であろう。しかしポリーとの交流がショー氏を変える。毎朝語らいながら一緒に散歩をし、帰宅後は家の中でくつろげるよう身の周りのことに気を配るポリーによって、ショー氏は仕事一辺倒の生活の空しさと家族との団欒の大切さを痛感する。彼が破産した時に、子どもたちが父を見捨てず共に苦境を乗り越えようとしたのは、ポリーが父子の愛情と絆を回復させる手助けをしたからである。

一方ショー夫人は「5分おきに何かを欲しがる神経質で口やかましい病人」(52)で、虚栄心が強く日々を無為に過ごす上流階級女性の悪しき見本であろう。彼女は決して不親切ではなく、少女ポリーの都会での保護者になることは全く厭わない。しかし20歳の音楽教師となったポリーを家族のように家に住ませることは身分違いで世間体が悪く、「好ましくない」(135)と考える。子どもたちを甘やかす母であるが、自分本位で愛情には乏しい。夫が破産した時には、ただ不運を嘆き周囲の憐みを誘おうとするだけで、自分の愚かさと無力さを露呈させる。世間からは家族のお荷物と噂され、「お気の毒な奥様さえお慈悲で天に移されなさったら、ご家族にとっては安心でしょう」(299)とささやかれる。母としても妻としても、そしておそらく人としても無用な長物のように描かれるショー夫人には、見栄張りで軽薄な社会風潮に対す

るオルコットの嫌悪が凝縮されている。

3. 富裕層の子どもたちの教育

両親の欠陥は子どもたちの姿に映し出される。親の愛情と関心が不足するショー家の子どもたちは大人の真似をして流行りものを追ひ、ろくに勉強もせず浪費と快楽にふける。特にトムとモードについては「あまり楽しくない家庭に飼われている犬と猫のように暮らしている」(35)とポリーは思う。絹のドレスが汚れるという理由で末娘のモードをはねのけるショー夫人に「真の母親らしい心」や「優しい母親らしい顔」(114)が欠けていることを見てとったポリーは、自分の母を思い出す。母は常に子どもたちを受け入れ、「ただ正しい物事を教え、いい子になれるように子どもたちに手を貸し」(113)、「聡明な愛で正しく寛大な裁き」(114)を与えてくれる。ポリーは自分こそが「豊か」でモードは「貧しい」と感じ彼女に同情する(114)。ショー家の子どもたちは贅沢に育てられているが、適切なしつけや教えを受けられずいわばネグレクト状態に置かれている。

年の近い同性のファニーの社交的生活はポリーにとって驚きであった。ポリーは最初、若いレディを自称する16歳のファニーとその友人たちを「りっぱなドレスを着て何でもよく知っている」(8)と思い、無知で不作法な自分がファニーの恥になるのではと心配する。しかしやがておかしいのは彼女たちの方だと感じるようになる。

ポリーはすぐに自分が全く新しい世界にいることに気がついた。ここでの作法や習慣は田舎の家のシンプルなやり方とはすっかり違っている。・・・来なければよかったと思うこともたびたびあった。まず第一に、ここでは毎日ぶらぶらして、噂話をしたり小説を読んだり、大勢で街を練り歩いたりおしゃれをしたりするだけで、他にすることがないのだ。(33)

ファニーと友人たちは、都会の流行とは無縁で簡素な服装のポリーを「時代遅れの田舎娘」(77)と笑うが、ポリーには彼女たちこそ「一緒にいるところを見られるのが恥ずかしいような服装で、ハイヒールでつんのめるように歩く」(37)滑稽な存在に思われた。ファニーたちと観劇した「魅惑的で、刺激的」「ひどく豪華で俗悪でファッショナブルな」(14)最新流行のスペクタクルはポリーには不愉快で苦痛だった。このような不健全な娯楽は「子どもが見るのにふさわしいものではない」(16)と彼女は叫ぶ。ポリーは控えめだが、正しいと思うことは堂々と主張する勇気と生真面目さを持つ。このような彼女の芯の強さが、徐々にファニーたちの軌道修正を促していくのである。

日々の生活に不自由しない良家の子女たちにとって「勤勉」は重要な美德ではなく、知的活動への関心は概して薄い。学校は着飾っておしゃべりをするところで勉学は二の次である。12歳になったモードは姿勢が悪くなるという理由で、母親から学校へは行かなくてよいと言われている。20歳になったトムが通う大学も「勉強するところではなく陽気に騒ぐところ」(181)で、彼はやがて品行不良で退学となる。少女たちは読書に熱中するが、問題は読む本の内容である。まだ教育が普及していなかった時代は、読書は一部の男性エリートにほぼ限定された知的趣味であった。しかし1850年代にはニューイングランドの女性の識字率がほぼ100%となり(Wayne 74)、読書が大衆化された娯楽になると、出版物のジャンルが多様化し(Streeby 28)、読書の質が問われるようになる。ファニーたちが好むのは、たとえばポリーが選んだ「読む力を向上させる」(20)歴史ものではなく、「リアルで刺激的な」(20)通俗小説だった。ファニーが読

みふける『レディ・オードリーの秘密』(*Lady Audley's Secret*, 1862) はイギリスの作家メアリ・エリザベス・ブラッドン (Mary Elizabeth Braddon) のベストセラーで、オルコットがペンネームで発表した『仮面の陰で』(*Behind a Mask*, 1866) のヒントになったと指摘される煽情小説である (Keyser 48, 198)。煽情小説は窮屈な日常に縛られた女性たちのストレス発散の場であり、オルコット自身も背徳に満ちた作品の執筆を楽しんでいた (Stern 〈2〉 193)。しかしそれはあくまでも大人向けの娯楽である。煽情小説は未熟な子どもたちには知的刺激どころかむしろ害毒であるという見解を、オルコットは少女小説のなかでは一貫して示している。⁴

知的面だけではなく、都会の良家の娘たちは身体的にも不活発だった。彼女たちは幼い頃からまさに「コルセットやごてごてした重たい服で体を締めつけて、互いの家の訪問以外することがなく、神経衰弱にかかる19世紀の裕福な女性たち」(Reisen 192) であり、怠惰で不健康な生活に浸っている。体を動かすことは体裁が悪く、またその体力もない。外での運動が好きで健康的なばら色のほおのポリーとは対照的に、ファニーやモードは10代のうちから頭痛や胃痛、背中や目の痛みに悩まされる。体力とともに気力も低下し、気持ちがよどむ。22歳のファニーはすでに遊び飽きて「退屈で死にそう」(151) と言う。掃除や洗濯で少し体を動かすことを勧めるポリーに対するファニーの答えは「私にはそんなことはできないし、する必要もない」「誰かがお金持ちのために新しい遊びを発明してくれればいいのに」(151) という、上流階級の傲慢さと愚かさを露わにするものであった。しかし彼女の発言には、常に他者の目や耳を意識する緊張感にさらされ、「かごの中のリスのように毎年同じことを繰り返す」(151) 偏狭な世界に閉塞される有閑女性の哀れさにもじみ出る。ファッショナブルな生活の空虚さを自覚し、何かしなければならぬと感じながらもファニーが「代わりに何をしたらいいかわからない」

(236) のは、人生を有意義にするための健全な知識を与えられず、無知で無気力なレディが育成されるような環境に置かれていたからだ。

ファニーの言動はポリーとは正反対であることが多いが、実はショー家にはポリーと価値観が似ている人物がいる。それは「おばあさま」こと70歳になるショー氏の母親だ。彼女は昔の子どもたちは質素で10代の終わりまで活発に飛び回り家の手伝いをよくしたものだと言語、14～5歳の娘が大人を真似て流行のドレスを着てパーティ三昧という風潮を嫌う。しかしそのような自分の考えが今の時代に合わないことは承知している。都会の流儀に反発するポリーには「あなたはずっと田舎にいらしたのだから、慎み深さがもう流行遅れになったことをご存じなのです」(16) と言い、ポリーの価値観が通用しない現実があることを教える。彼女は昔の自分と同じような育ち方をしたポリーの素朴さと美德が愛おしくてならないが、時の流れに抗うことはあきらめ沈黙する。

おばあさまに求められるのは「みんなの邪魔にならないように、人前に入る時だけ着飾る」(36) ことで、家族からは忘れられた骨とう品のように扱われる。ファニーは「年寄りや退屈でうるさいから、近づかないようにしている」(112) と言い、「何か面白いことをしようとするとすぐ〔反対して〕大騒ぎにになってしまう」(22) 祖母を敬遠する。しかし同世代のポリーがおばあさまと同じ考えを持ち、ポリーの言動が「育ちの良さや洗練、気品の見本」(112) とされる人々から称賛される場面を見て、ファニーは時代遅れで無用なものとして切り捨ててきたものの意義を見直し、自分の軽薄さに苛立つ。そしてポリーの飾り気のない思いやりには、見栄を張り合うお嬢様仲間との交友からは得られない真実があることを認めるのだった。ポリーの良さを知ることは、おばあさまの良さを知ることにつながる。もしショー家の子どもたちがおばあさまの豊かな経験に基づく知恵と適切な導きに耳を傾ける気があれば、無為な生活

を多少ならず改善することができたはずなのだ。当世風ではないおばあさまの考え方は、若い世代のポリリーと共有されることによってその利点が再評価される。良いものに新しさや古さは関係ないという教えをここに読み取ることができようか。

4. ポリリーの弱み

都会の風俗を具現化したショー家とは対照的で古風な少女ポリリーは、当世の浮ついた風潮へのアンチテーゼとしての役割を担う道徳モデルである。しかし彼女はショー家の子どもたちを感化するためだけに存在しているわけではない。作者は序文で、ポリリーは完璧なモデルではなく、より良く成長する可能性を持つ少女だと解説している（v）。ポリリーは克服すべき欠点を持ち、苦しんで自己を磨いていくヒロインなのである。

14歳のポリリーは、体を締めつけない質素で健全な「子どもらしい」身なりが自分にはふさわしいことをよく知っている。ファニーたちの華美でばかげた服装を批判する良識を持っている。しかし華やかなドレスを毎日見ていれば、自分もおしゃれをしたいという気持ちを抑えきれない時もある。彼女を虚栄の誘惑から守るのは、母とおばあさまだった。ドレスの仕立て直しを願うポリリーに、母は気取りのない古い型がポリリーには似合うのだと戒める。

私はかわいいポリリーが、中身ではなく服装で愛されるようにはなってもらいたくないのです。……私の娘はきっと、満ち足りた心と幸せそうな表情が、どんなパリ製の品^{しな}よりもりっぱな装飾品になるということを、他の人に見せてあげるでしょう。（44）

おばあさまも「あなたみたいな若い娘は、今身につけている若さ、健康、聡明さや慎み深さがあれば装飾品なんて必要ありません」（118）と言ってポリリーを勇気づける。作中には、あっさりした服装がいかに快活なポリリーを魅力的に引き立てるかという描写が何度も出てくる。それでも彼女はしばしば誘惑に負け少し贅沢なものを買っては後悔するのである。

おしゃれへの渴望は20歳になっても消えることはないが、その思いを抑制するのは経済的理由だった。都会で自立するポリリーには社交用のドレスを買う余裕はなく、ファニーたちが開く催し物への出席もためらいがちなる。これは音楽会や賑やかなパーティの楽しさを覚えてしまった彼女には辛いことで「キャンディを取り上げられた子どものように思い切り泣く」（162）こともあった。「妬みという苦い雑草」（127）や「小さな虚栄心や気まぐれな欲望」（168）は何度もポリリーに襲いかかり、彼女はそれに打ち勝つための葛藤と反省を繰り返す。

もしポリリーが道徳モデルの役割に忠実で、模範的で非の打ちどころのない少女に設定されたとしたら、型どおりで面白みに欠ける嫌味なキャラクターになっていたかもしれない。ポリリーが作品のなかで魅力的に息づき読者の共感を得られるのは、彼女のような誰からも好かれる「よい子」が弱みをさらけ出しているからだろう。彼女は読者の良き手本にも反面教師にもなっている。

5. これからの女性

『昔かたぎの少女』の主たるテーマは“old-fashioned”と“fashionable”の対比であろうが、オルコットがポリリーを通してさらに描きたかったのは、南北戦争後のアメリカにおける新しい女性の生き方である。女性にとって家族への心遣いや家事の技術といった伝統的な家庭的資質は大切であり、父の破産で傷心したファニーやモードは家事労働を学ぶことで人生を立て直す。一

方で作者はポリーの周囲に「連帯する女性たち」を配することで、家庭の外にも女性の活動場所があることを示すのである。

ポリーが都会で音楽教師になり下宿生活を始めたのは、弟の学費を援助するためであったが、20歳になり、「聞こえのいい名前」(139)を持つ生徒を集めるだけの処世術を身につけていた彼女には、独立独歩の暮らしをしたいとの思いもあった。自立を望むヒロインは『若草物語』のジョー・マーチや『仕事』(*Work*, 1873)のクリスティ・デヴォンなど、オルコットの作品にはしばしば登場しており、彼女たちには作者自身の自助意識が強く反映されている。住み込みのコンパニオンなど、多くの職を体験したオルコットは「私の奉公体験」("How I Went Out to Service," 1874)というエッセーで18歳の自分を回想し、「私には働く意思があり、自立を望んでおり、庇護を受けるのは自尊心が許さなかった」(350)と述べている。アメリカには建国以来の自主自立を尊ぶ気風があり、また教育が普及してきた19世紀後半には、女性にもさまざまな能力的可能性のあることが意識されるようになっていた。ポリーのように都会で一人暮らしをする若い女性は珍しくはなかった。

ポリーの独立生活は順調に始まるが、新しい生活には希望とともに苦痛も存在する。仕事に軌道に乗ると日常は単調になり、一人暮らしの寂しさをポリーは嘔みしめる。さらに自立する若い女性というものが、必ずしも社会的に認知されていないことも実感する。

女性の進歩を常に妨げるいばらの道を自分で進もうとするポリーを傷つけるもう一つのとは、自由の国アメリカでさえ、自活のために働く多くの人から拒絶されるという発見だった。(154)

特に上流階級の人たちにとっては、女性が働くことは体裁が悪いことだった。ショー家の客であったポリーの知る都会の生活とは上流階級のものだけであったが、音楽教師として働くことにより彼女はその世界から疎外され、階級差という現実と直面する。しかしこの経験により彼女は、都会には別の世界、すなわち自分と価値観を共有できる「忙しく、幸せで、自立心があり、目的や才能や大望を持つ女性たち」(113)の世界があることに気づくのである。

じきにポリーはここに自分の居場所があることを見いだした。この小さな世界では愛と自由が広く浸透し、才能と活力と個性が上位にあり、お金や流行や地位などは文字通りどこにもなかった。(208)

ポリーは自分の仲間を、人生の目的を見つけられず虚無に陥るファニーに紹介する。それは2人の若い女性芸術家で、「これからの女性 (coming woman) の像」(240)を粘土で作成しているところであった。芸術家は像を次のように説明する。

「これからの女性像は」強い意志と強い愛情、強い精神と強い肉体を持っています。だから私たちはこれを今の時代のみじめで貧相な女性より大きく作ったのです。強さと美しさは相伴うべきなのです。このがっちりした肩は重荷にも崩れず耐えられると思いませんか。この手はよく働き、目は物をはっきり見て、唇はお愛想やゴシップ以外のものを語ると思いませんか。(241)

2人の芸術家とポリーとファニーは、「これからの女性」像が手に持つのにふさわしいシンボルについて話し合う。男性の手や古い王国の杖は独り立ちしている女性には必要ないという理由で却下される。子どもは「子育ての他にもっとすることがある」(241)ためシンボルには不十分だとされた。選ばれたのは「女性には使う権利のある」(242)投票箱であった。さらに足元には針、ペン、箒など、「女性が多方面に才能を持つことを暗示するもの」(242)が置かれることとなった。

この女性像の場面には、女性参政権運動に熱心だったオルコットのフェミニズム思想が色濃く反映されているが、その激烈さを和らげるかのような記述も加えられている。作者は2人の芸術家について、ポリーには「独り立ちしているのに女らしい」(244)、ファニーには「男みたいだがさつ」(247)だと思っていたが違っていたと言わせて、女性らしさそのものを否定はしないような配慮を見せている。それでもこの新しい女性像の場面の印象は強烈で、作品全体のなかではいささか浮いているようにも感じられる。

ポリーがもう一つ認識したのは、貧困から抜け出せず援助が必要な労働者階級の人たちの存在であった。近所に住む貧しい身寄りのない少女が生活に行きづまって自殺を図ったのがきっかけだった。ポリーはファニーのような有閑層の女性たちに、貧者への慈善活動を期待する。これは社会的に有意義で体面が傷つけられることもなく、ファニーを退屈で死にそうな無為から救うものであった。ポリーは2つの階級の橋渡しを担う。彼女の活動は個人的で小さな範囲に限られるが、このような慈善活動のコーディネートを天職として組織的に取り組もうとするのが『仕事』のクリスティである。

“Old-fashioned”という語は常にポリーを形容する表現であるが、女性としての生き方を模索し社会に目を向けて活動を始める点では、彼女は古臭いどころか「最も先を見つめている」(Matteson 362)新しい時代の視点を持つ女性なのだ。一方で目先の流行を追うばかりの不健康な上流階級の女性たちは、既成の価値観に固執したまま時代の進歩に取り残され、過去の遺物になっていく。両者の立場はいつしか反転するのである。

6. 結婚の思惑

等身大の若い娘たちが登場する少女小説では、結婚の話題を避けることは難しいだろう。しかし結婚信奉のないオルコットは、読者の少女たちが結婚こそが女性の人生の唯一の目的だと考えヒロインたちのロマンスを期待することに辟易していた(*Journals*, 167)。『昔かたぎの少女』では結婚はあまり肯定的に扱われていない。小説の前半部分を月刊誌に掲載していた頃、トムとポリーは結婚するのかと尋ねられた作者は次のように明言する。

このお話には結婚は出てきません。『昔かたぎの少女』ではそういったぐいのナンセンスは子どもにふさわしくないと考えていますし、子どもたちは大人にはなりません。(Stern <2> 196-7)

この発言の時点では、オルコットはまだポリーたちが成人する後半部分を書くつもりはなかったのである。

14歳の純朴なポリーにはまだ結婚への意識はなく、6歳のモードが婚約ごっこに興じるのをばかげて不自然だと思う。20歳になればポリーも恋愛問題に一喜一憂するようになるが、ファニーの友人トリックスが男性を追い回して求婚させる様子には不快感を隠さない。トリックス

は恋愛の駆け引きを狩猟にたとえ、自分に近づく男たちを獲物とみなしている。

若い女性の貪欲な婚活は浅ましい行為として、『若草物語』や1868年発表のエッセー「幸福な女性」(“Happy Women”)のなかでも批判的にされる。しかし働いて自活することが許されない上流階級の娘たちは「自分の第一の義務はよい結婚をすること」(254)と教え込まれてきたのだ。従ってより良い結婚相手を求めて最善を尽くすことは必然の自助努力である。彼女たちの結婚をポリーは「家柄のために自分を売る」(264)と非難する。ポリーには人柄も家柄も申し分のない青年が好意を寄せており、もし彼と結婚すればどれほど豪華な未来が約束されるだろうと彼女は想像する。しかしすぐにその夢を退け、自分は心から愛せる人と結婚できなければ独身の音楽教師で一生を送ると言う。だが結婚が死活問題であるならば、結婚市場で自分を高く売ることが極めて重要で、「求婚者が多ければ多いほど名誉」(249)なのは当然のことだ。トリックスの行為は確かに道徳的には褒められはしないが、彼女は自分の義務に忠実であろうとしただけだ。この花婿探しという義務を究極化したものが煽情小説『仮面の中で』であろう。ヒロインのジーン・ミュアはあらゆる手管を用いて男たちを騙し、金と地位のある夫を手に入れる。少女小説ではおそらく描くことができないジーンの悪女ぶりに映し出されるのは、女性の可能性を制限して結婚を強いる社会規範の理不尽さである。

『昔かたぎの少女』には、新しい「結婚」の形が紹介されている。それは2人で一緒に暮らしている「これからの女性像」の女性芸術家たちのことだ。この小説では“partnership”と表現される独身女性の2人暮らしは、19世紀末にはよく見られるようになった形態で「ボストン・マリッジ」(Boston marriage)と呼ばれていた。「結婚」と称しているがカップルには通常性的関係はないとされ、同居は社会的にはほぼ容認されていたという(Clinton 111)。この2人の芸術家の場合、近々片方が結婚する予定だが、「恋人でもこの2人の友を引き裂けない」(245)ため、結婚後は3人で暮らすとの設定である。性的関係の有無はともかく、ボストン・マリッジは“sisterhood”と呼ばれる「姉妹の連帯」から生じたものだが、結婚後の3人暮らしというさらに新しい生活形態は、「男女の連帯」と「姉妹の連帯」は両立が可能で、しかも「姉妹の連帯」の方が優先されるということを示唆している。

7. 結婚という結末

オルコットは小説の前半部分執筆時には、登場人物の結婚はないと宣言していたが、後半部分に入り最後の章になるとついに結婚回避をあきらめる。

・・・私がある物語を自分の好きなように終わらせようとしたところ、さまざまな脅しや非難や不平が降り注がれて私をおびやかしたので、ついに皆さんを満足させようという優しい願いをおこすことにした。その結果統一性や一貫性をすべて無視するという危険を冒して、手当たりしだい結婚させることになったのである。(335)

ある物語とは『若草物語』を指す。オルコットは読者の要望に屈してジョーを結婚させたことを後悔していた(Letters, 125)。『昔かたぎの少女』でも結婚への抵抗が続けたが、結局は読者の要求には背くことができず、自分の意に染まない結末だということをあからさまに示したうえで結婚を実行させる。作者の言うとおり、登場人物たちは最後の数ページでこれまでの物語の展開を無視するような勢いで結婚へとなだれ込む。

ポリーやファニーの結婚は、善行や自己改善の報酬のように与えられる。ポリーはトムと結

婚するが、彼女の功績は放蕩三昧だったトムを「儉約家に、正直に、勤勉に」(343)改心させたことにある。ファニーは努力して家庭的なたしなみを学び、その成果が憧れの紳士の心をつかむ。2人とも「女性らしい資質」が認められ、ふさわしい相手に選ばれて結婚に至る。ファニーの結婚は破産前の水準以上の生活を彼女にもたらす。勤勉なポリーの結婚には、借金を抱える夫とともに働ける幸福がある。彼女の良い特性はトムとの結婚で損なわれることはないだろう。しかし独立独歩の気概を培ってきたポリーとロマンスに身をゆだねるポリーとでは、どこかちぐはぐな感否めない。唐突な結婚話によって人物像の統一性は崩されてしまう。

ポリーの2人の弟たちにも伴侶を与えたオルコットが唯一読者の意向に従わなかったのは、モードの未来だった。モードだけは結婚の渦に巻き込まず、「生涯多忙で快活な独身女性」(345)に留め置いた。ただし父親のために家事に専念するモードは、夫の代わりに父親によって家に縛られているという見方もでき、自立という点では物足りない。「幸福な女性」で紹介されるような、専心できる仕事を持って完全に自活し充実した人生を送る独身女性の登場は、オルコットの小説では1886年の『ジョーの息子たち』(*Jo's Boys*)の医師ナンまで待たなくてはならなかった。

『昔かたぎの少女』は昔ながらのおとぎ話の決まり文句で締めくくられる—「こうして彼らは結婚しました。そしてみんな死ぬまで幸福に暮しました」(345)。この投げやりにも聞こえる締めくくりは、作者にとって信念を曲げて登場人物を手当たり次第に結婚させることがいかに不本意だったかを物語っている。一方では、あえて陳腐な文句を出すことで、人生とは結婚でひとくくりされるほど単純ではないという逆説を挑発的に示しているようにも思われる。

読者は時に作者に介入するやっかいな存在であるが、作品の読みの可能性を広げて作者に貢献することもある。読者には「結婚したこと」と「死ぬまで幸せに暮らしたこと」の間に何があったのか、好きなように解釈することができるのだ。ポリーたちが結婚して、強く美しい「これからの女性」に成長して、その結果死ぬまで幸福に暮すことができたと思像するのであれば、不本意な結婚をヒロインに強いた作者の無念も少しは晴れるのではないだろうか。

注

1. 引用部分の邦訳は『昔かたぎの少女』については吉田勝江訳を参照。その他はすべて拙訳。
2. 『若草物語』第2部は、イギリスとカナダでは『よき妻たち』(*Good Wives*)というタイトルで出版された。
3. 『若草物語』の反逆性については、拙論『『若草物語』における少女たちのロールモデル』(『英語英文学論叢片平』46: [2011] 37-49)で詳しく論じている。
4. 『若草物語』や『八人のいとこ』では、登場人物が煽情小説の有害性について語る場面が描かれている。

参考文献

- Alcott, Louisa May. *Alternative Alcott*. Ed. Elaine Showalter. New Brunswick: Rutgers UP, 1997.
- , *An Old-Fashioned Girl*. 1870. New York: Puffin, 1996. 『昔気質の一少女』(上巻、下巻) 吉田勝江訳 角川文庫 1990年
- , “Happy Women.” 1868. *Alternative Alcott*. 203-206.
- , “How I Went Out to Service.” 1874. *Alternative Alcott*. 350-363.
- , *The Journals of Louisa May Alcott*. Eds. Joel Myerson and Daniel Shealy. Athens: U of Georgia P, 1989.

- , Preface. *An Old-Fashioned Girl*. By Alcott. v- vi.
- , *The Selected Letters of Louisa May Alcott*. Ed. Joel Myerson and Daniel Shealy. Athens: U of Georgia P, 1987.
- Clark, Beverly Lyon, ed. *Louisa May Alcott: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Clinton, Catherine, and Christine Lunardini. *The Columbia Guide to American Women in the Nineteenth Century*. New York: Columbia UP, 2000.
- Keyser, Elizabeth Lennox. *Whispers in the Dark: The Fiction of Louisa May Alcott*. Knoxville: U of Tennessee P, 1993.
- Matteson, John. *Eden's Outcasts: The Story of Louisa May Alcott and Her Father*. New York: W.W. Norton & Company, 2007.
- Reisen, Harriet. *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*. New York: Henry Holt and Company. 2009.
- Showalter, Elaine. Introduction. *Alternative Alcott*. By Alcott, ix-xliii.
- Stern, Madeleine B. 〈1〉 *Louisa May Alcott: A Biography*. Boston: Northeastern UP, 1999.
- , 〈2〉 *Louisa May Alcott: From Blood & Thunder to Hearth & Home*. Boston: Northeastern UP, 1998.
- Streeby, Shelley. *American Sensations: Class, Empire, and the Production of Popular Culture*. Berkeley: U of California P, 2002.
- Wayne, Tiffany K. *Women's Roles in Nineteenth-Century America*. Westport: Greenwood, 2007.
- 田中久雄「アメリカ文学における階級—歴史的な概観と研究の問題点—」『アメリカ文学における階級—格差社会の本質を問う—』田中久雄監修 早瀬博範編著 英宝社 2009. 3-25.

